

2019年9月1日

## 福音書からのメッセージ

だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。

(ルカによる福音書 14 章 11 節)

ユダヤ人は、食事を社会的な儀礼として捉えていました。つまり、どこで、だれと食事をするのかということをととても大切にしていたのです。さらにその食事の場で、どの席につくとよいのかということも大事です。この食事の様子を見ると、その人の社会的なステータスがわかりました。そして人々が上席を好むのには、わけがあったのです。上席に座るということ、それは自分がそれだけの地位にあると考えたからだし、人からそう見られたいからでした。つまり自分はその場所にふさわしい者だと考えたのです。そして上席から末席を見下ろして、自分のおかれた場所に満足する。それがユダヤでの食事の風景だったので。その様子をイエス様は見ておられました。そしてたとえを語られたわけです。「あなたが婚宴に招待されたら」と。

婚宴とは、神の国の宴会のことです。あなたたちが神の国の宴会に招待されたらどうするか、とイエス様は語り始められます。わたしたちが神の国の宴会に呼ばれる。そのときに、それは当然だ、わたしは呼ばれるだけのことをした。呼ばれてしかるべき理由がわたしにはある。そのように考える人はいるでしょうか。

わたしたちが誰かを食事に誘うことを思い浮かべてみてください。わたしたちは誰を誘うでしょう。家族や親戚、お世話になった人、仕事仲間や友人、これから関係を持ちたい人など。しかし神さまにとって、わたしたちはそのような関係にあるのでしょうか。

神さまからみて、わたしたちはちっぽけな一人一人です。何度も罪を犯し、神さま



に背き、本当であれば神さまに見棄てられても何らおかしくない一人一人です。その神さまから、招待状が来るのです。半信半疑です。この招待状のあて名は間違っているのかもしれない。だまされているのかもしれない。でも恐る恐る招待状を手に、指定された場所についたら、「お待ちしておりました」と迎えてくれる。

通された部屋は、大きな広間です。もしわたしたちが心の底から、わたしなんてふさわしくない、場違いだと思うのであれば、上席なんかにつくことができるでしょうか。謙遜に、ということではないのです。わたしたちは自分のことをちゃんとわかっているのか、そしてそれでも招いてくださる神さまのお恵みに気づいているのか、そういうことだと思います。

末席で、ただじっとしているわたしたちの姿を見て、招かれた神さまはこう語り掛けます。「さあ、もっと上席に進んでください」と。この「さあ」という言葉、実は原文では、「友よ」という意味の言葉が使われています。あなたは場違いではない。招きに応じたあなたは神さまにとって、友なのです。かけがえのない存在なのです。

そのことをわたしたち一人ひとり、覚えていきたいと思います。

### 桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>